

## 飛鳥資料館冬期企画展のご紹介

### 発掘調査速報展

#### 「飛鳥の考古学 2007」

平成20年1月4日(金)～2月3日(日)

2007年は、飛鳥における発掘調査が、考古学や文化財保存にとって歴史に残る年になりそうです。それは、高松塚古墳石室の解体作業に象徴されています。8月、全国民が注目するなか、石室の解体は無事終了しましたが、これは一連の高松塚古墳壁画保存問題の一つの画期となるものでした。解体に伴う発掘調査では、壁画の劣化に結びつくさまざまな情報に加えて、墳丘を形成する細かい版築層、造成する際に用いられた葦むしろや、突き棒で盛土を突いた痕跡もみわかりました。これらは、高松塚古墳を築造する際の高い技術を示すもので、考古学的にも重要な知見であります。

飛鳥の地には、歴史をめぐる、さまざまな謎が残されています。発掘調査では、こうした謎にせまる手がかりもみえてきました。蘇我蝦夷・入鹿

親子の邸宅があったといわれる甘檜丘では東麓遺跡の調査により石垣を発見、邸宅との関係が注目されました。石神遺跡では、古代の幹線道路・山田道の南側溝とみられる溝を確認し、飛鳥における都市計画の実体解明も進められています。

飛鳥資料館では、こうした発掘の最新情報を広くご紹介するため、昨年引き続き、明日香村教育委員会と共催で「飛鳥の考古学2007」を開催致します。調査により得られた知見や出土品を通して、飛鳥の歴史を実感していただければ幸いです。

(飛鳥資料館 西田 紀子)



解体直前の高松塚古墳石室